キャリアアップ研修　３【　幼児教育分野　】

日時：2026年4月30日（木）

会場：各自（オンライン）

講師：十文字学園女子大学　名誉教授

OMEP日本委員会　理事

NPO法人練馬春日町幼児教育はじめのいっぽ春日町　理事長

上垣内　伸子　氏

内容：子どもがはじめた遊びが大事

受講者同士による手・声・顔を使った「いないいないばあ」の挨拶から始まる。

最強のおもちゃは「あなた自身」であり、手（スキンシップ・トイ）・声（コミュニケーション・トイ）・顔（ビジュアル・トイ） この3つが揃う「いないいないばあ」は、言葉や文化、状況を超えて子どもを笑顔にする「世界最強の遊び」である。

1.誕生からの教育を受ける権利（CRC：子どもの権利条約の視点）

こども基本法や子どもの権利条約（CRC）を土台とし、子どもを「権利の主体」として捉える。第12条の「意見表明権」における「意見」とは、“opinion” ではなく、“views” を指す。言葉を持たない乳幼児や赤ちゃんにも確固たる “views” があり、保育者はその「代弁者（アドボケーター）」として、耳だけでなく「目で聴く（Listen with your eyes）」姿勢が求められる。

2.乳幼児期の発達特性

感覚（五感）と動き（操作や接近）に出会い、情緒と認知、心と頭、感じると考えるが一体化、「今」に生きている＝「今」しかない遊びとは、自発的な活動である（自ら始める）、遊ぶこと以外に目的をもたない（何かをできるようになるための手段ではない）、楽しいものである。

100の言葉に耳を澄ます

3.子どもの権利条約

第12条にある「意見」と訳された言葉“views”は、子どもの目から見えるもの、子どもなりの捉え方であり“opinion”ではない。どの子も話す前から“views”をもっている。

4.子ども主体の保育とは？

（1）安心感の保障→安心して、自信をもって大きくなる

（2）自発的活動としての遊び「子どもが始めた遊びが大事」

（3）成長主体としての子どもの有能性　成長可能性への信頼と尊重

（4）環境を通しての保育→有能性を土台に置く保育の鍵は環境＝子ども主体の保育

（5）主体性と相互性→仲間と育つ～有能性は相互的・対話的学びを導く

5.まとめ

保育は「今」と「未来」を育てる仕事である。しかし、「未来」のために「今」があるのではない。いつも、「いま、ここで、あたらしく」時が始まる。「今」に生きる子どもが始めた遊びが大切である。保育者は、「教える人」ではなく、「共に驚き、支える人」である。